

議 長 総 括

紛争の想定外の拡大

石津 朋之

令和元年度の戦争史研究国際フォーラムは、そのテーマを「紛争の想定外の拡大」とした。一定の計画と構想に基づいて開始された武力紛争、あるいは個別の作戦が、想定外の規模に発展してしまう例は稀ではない。そのような事態にどのように対処すればよいのかという問題は、各国が普段から検討しなければならない重要な課題である。今回は、武力紛争が想定外に拡大した事例をいくつか取り上げ、紛争の管理についての理解を深めることをめざした。

戦争史研究国際フォーラムの概要は、以下の通りである。

まず基調講演として、スティーブン・バズイー教授（以下 S・バズイー教授）が「軍事戦略と紛争の想定外の拡大」と題する研究報告を行った。S・バズイー教授は、戦争には予想可能なことなど何も無いが、全く予想がつかないこともほとんど無いとし、20世紀以降の近代的な軍隊による、戦争レベルと作戦レベルでの紛争の拡大に関する事例について概観した。紛争の想定外の拡大をもたらす重要な要因として、交戦国の突然の増減、地形や気象等の自然現象の影響、作戦レベルでの予想外の勝利（敗北）を挙げ、このような紛争の拡大に対処するための最も重要な要素として、相手を凌駕する十分な量の兵力の確保、宣伝工作、訓練、武器の製造等の戦力造成を挙げ、そのための事前の準備の重要性とともに、武器製造よりも兵士の訓練に要する時間の方がより大きな影響を及ぼすと評価した。

第1セッションでは、日中戦争、朝鮮戦争及びベトナム戦争における「戦争の拡大」に焦点をあてた3つの発表が行われ、それに対するコメント及び質問がなされた。はじめに、戸部良一教授は、「日中戦争の拡大と日本陸軍 1937年7月～1938年10月」と題した発表を行った。戸部教授はまず、日中戦争を日本陸軍の対応という観点から、①盧溝橋事件から上海出兵まで、②全面戦争化と戦面不拡大方針、③軍事的解決の模索、④長期持久戦、⑤太平洋戦争期の5つの時期に分け、このうち紛争拡大期に相当する①から③の期間を概観した。戸部教授は、意図せざる拡大を招いた日本側の要因として、第1に中国の抗戦力の過小評価、第2に兵力の不足及び逐次投入、第3に短期決戦志向、第4に要地攻略志向、第5に現地軍への統制力の弱さを指摘した。

次に、アラン・R・ミレット教授は、「『不意打ち』に驚かされることを嫌った将軍—ダグラス・マッカーサーと朝鮮半島1950～1951年—」と題した発表を行った。ミレット教授はまず、当時の米国の政治目標は、日本の防衛のために韓国を保全することであったがマッ

カーサーは半島情勢に余り関心がなく、日本の復興と改革、そして対ソ防衛に専念しており、朝鮮戦争勃発後の1年目に戦略的な「不意打ち」に3回見舞われたと述べた。1回目は北朝鮮による開戦（1950年6月）であり、情報は上がっていたものの、隷下の海・空軍司令官も進攻を予想しておらず、更に韓国軍が守るソウルが4日で陥落したことはマッカーサーを驚かせた。2回目は中国の参戦（同年10月～11月）であった。人民解放軍が満州に展開しているとの情報が事前に確認されていたが、マッカーサーは、その情報を無視した。3回目は自らの解任（1951年4月）であった。マッカーサーは、米国政府の目標が朝鮮半島の解放と統一から中国との講和による戦争終結へと変わったことを受け入れられず、トルーマン政権により解任された。ミレット教授は、米国が戦略的な大惨事を食い止めることができたのは、ウォルトン・ウォーカー中将、その後任のマシュー・リッジウェー中将の見事な指揮ぶりや一般兵士が粘り強く戦ったからであると結論づけた。

最後に、アルバート・パラッツォ博士は、「戦争の要請に応じて—オーストラリア陸軍とベトナム戦争—」と題した発表を行った。パラッツォ博士はまず、オーストラリアの安全保障政策について、東南アジアからもたらされる脅威に対して、自力で国防を全うすることは不可能であり、オーストラリアのベトナム戦争参戦の目的は、東南アジアにおける米国の軍事的コミットメントを継続させることであったと指摘した。そして、1個大隊基幹で始まったオーストラリア陸軍の派遣は、犠牲を厭わない米軍との戦術の相違やベトコンに盗まれた地雷によりオーストラリア兵の犠牲者が急増し、反戦運動が高まるなどの問題を抱えつつ、8,000名弱の第1オーストラリア任務部隊（1ATF）へと拡大していった経緯を述べた。最後に、ベトナム戦争がもたらした大きな変化として、オーストラリアがANZUSに依拠しつつ自国の防衛に関し更なる責任を負うこととなったこと、職業軍人からなる常設の陸軍の必要性を確信するようになったことを挙げた。

以上を踏まえ、討論者の花田智之主任研究官は第1セッションの各発表を概観した後に、「戦争目的（war aims）と紛争の拡大との関係性」及び「和平交渉、停戦協定（朝鮮戦争の場合は休戦協定）と紛争の拡大との関係性」について3人に質問した。

戸部教授は、日中戦争の計画及び目的は当初より不明であり、戦火及び犠牲の拡大につれて膨らんでいったと述べた。また、船津元上海総領事、トラウトマン駐華ドイツ大使、宇垣外務大臣による和平工作は為されていたものの、軍事工作との連携はとれていなかったと指摘した。

ミレット教授は、朝鮮戦争における当初の戦争目的は民主的な選挙により1948年成立した韓国の保全であったが、1950年10月にはこれが民主政体による統一朝鮮へと拡大し、後に中国の介入によりこれがまた元に戻ったと指摘した。他方、中国にとっての戦争目的は、米韓の攻撃に対して北朝鮮を保全することであることは自明であったが、その義勇軍を同

国内に留めることは歓迎されなかった。このため、北朝鮮全土の要塞化が進められることとなった。米国は、休戦後も残留することになったが、韓国自身による防衛に期待していたこと、また休戦交渉そのものも捕虜交換に係わる議論や韓国の拒絶等の要因により難航した旨述べた。

パラッツォ博士は、ベトナム戦争におけるオーストラリア軍の派遣規模はとても小さく、軍事レベルにおける米国の戦略に影響を及ぼすことはできなかったものの、政治レベルにおいては同国を東南アジアに引きずり込むという目標の達成に成功したと述べた。また、オーストラリアはベトナム戦争を妥当な兵力によって積極的に支援したが、8,000人以上の増派は、徴兵制度を必要とするため、内政上の理由により不可能であったと述べた。このほか、米国のジュニア・パートナーとしてのオーストラリアの立場からは、和平交渉に影響を及ぼすことはほぼ無かったと回答した。

第2セッションでは、第一次世界大戦におけるガリポリ作戦、第二次世界大戦における日本の南太平洋における作戦及び独ソ戦における「作戦の拡大」に焦点をあてた3つの発表が行われ、それに対するコメント及び質問がなされた。

はじめに、フィロミーナ・バズイー博士（以下 P・バズイー博士）が「1915～16年のガリポリ作戦におけるイギリス軍の想定外の医療危機」と題した発表を行った。P・バズイー博士は、当初短期戦を想定していたイギリス軍が予想外の膠着状態に陥り、厳しい環境下で大量の傷病兵が発生する状況において、治療・後送態勢を整備し、対応していく過程を明らかにした。最後に、イギリス軍が1916年1月ガリポリから撤退する際、前述の傷病兵の後送態勢を先例とすることで少ない犠牲でこれを実施することに成功したと結論づけた。

次に、進藤裕之主任研究官が「南太平洋における日本の戦略 1942～43年」と題した発表を行った。進藤主任研究官は、南太平洋における一連の作戦は結果的に太平洋戦争全体の帰趨に大きな影響を及ぼしたものの、当初同地域で作戦を行うことを日本軍は想定しておらず、これが予想外に拡大した原因として、第1に戦略目標を達成する具体的方法に関する陸海軍の見解不一致、第2に作戦の経過とともに戦略そのものが曖昧となったことを指摘した。そして1942年8月より生じたガダルカナル島の争奪戦を契機として、陸軍が南太平洋において対米戦に全面参戦したことが、日本の作戦を想定外に拡大させた最後の要因であり、明確な戦略を欠いたまま陸海軍が消耗することにより、日本の攻勢は終焉を迎えたと結論づけた。

最後に、ジェファリー・P・メガーギー博士が、「破滅の拒絶—ドイツ統帥部とソ連における攻勢の失敗 1941年秋—」と題した発表を行った。メガーギー博士は、まず参謀総長ハルダーに代表されるドイツ国防軍の対ソ戦に対する楽観と、その根底にあるソ連及び赤軍、延いてはスラブ民族に対する優越感を強調した。このような「粘土の足 (feet of

clay)」の上に立つ巨人ソ連は、ドニエプル川とドヴィナ川以西において赤軍に一撃を加えることにより、容易に倒壊すると信じられていた。このような甘い見通しの背景として、メガーギー博士は前述した優越意識に加えてドイツ国防軍が西部戦線での勝利に驕っていわゆる「戦勝病 (victory disease)」に罹っていたことを指摘した。結論としてメガーギー博士は、1941年6月に開始したソ連進攻が、当初の見積もりである11～14週間を経過しても終わらず、10月に発動されたモスクワ攻略(タイフーン作戦)も戦局を打開するには至らず、逆に冬季攻勢を受けた原因として、ドイツ国防軍の楽観主義、ソ連及び赤軍に対する軍事的、政治的、そして人種上の優越感があったと再度強調した。

以上を踏まえ、討論者の齋藤所員は戦略と戦術の中間に位置する作戦次元が、戦争を左右する重要な要素であることを指摘した後に、以下のコメントを3人に行った。まず、P・バズィー博士に対しては治療・後送面からガリポリ作戦を捉えた際に、これが衛生の側面に留まることなくじ後の円滑な撤退の布石となったことが興味深い旨を指摘した。次に、進藤主任研究官に対しては第二段作戦における日本陸海軍の相克が、結果的に南太平洋方面における作戦の拡大を招き、数十万の将兵が戦没することとなった点を述べた。メガーギー博士に対しては独ソ戦がナポレオンによるモスクワ攻略の二の舞となった背景として、ハルダーに代表されるドイツ国防軍の楽観的思想がその根底にあったこと、対照的にヒトラーが通説に反して現実をよく理解していたことを挙げた。また、兵站面においては、その不備が住民等に対する残虐行為を生み、この反応であるパルチザン戦が絶滅戦争としての独ソ戦の性格に繋がったことを述べた。そして、ハルダーが「負けたと思った者が戦争に負ける」と戦後述懐したことを、東条英機がサイパン陥落に際して述べた「必勝の信念」と対比し、敗北の縁において日独が共に精神主義に縋ったこと、またプロスペクト理論を引用して開戦時における作戦の見通しについても共通する楽観的思想があることを述べた。

齋藤所員は、続いて日独の作戦には共通して観念的要素があることを指摘した上で、進藤主任研究官に対し南方作戦と南太平洋における作戦の差異について、メガーギー博士に対しては西方作戦とバルバロッサ作戦との差異について、そして進藤主任研究官、メガーギー博士の両者に対して攻勢終末点前後における作戦の管理及び後方地域との関連性について質問した。

進藤主任研究官は、南太平洋戦域における日本軍の作戦に関して、陸軍参謀本部、海軍軍令部、連合艦隊という3つのアクターが存在すること、そしてこれらの中で作戦目標がほぼ共有されていなかった点を指摘した。他方、開戦劈頭実施された南方作戦においては「資源地帯の獲得」及び「連合国拠点の覆滅」という目標が共有され、どの地域を何のために獲得するのかについて認識が統一されていたことがじ後の南太平洋における作戦との大きな差異であることを強調した。また、後方地域の管理については1942年以降余り考え

られておらず、陸軍の見方によると海軍はもとより必要な補給物資を積載して航海するため、どこまでが補給可能な範囲かという意識が無く戦線を拡大したのではないかと述べた。このほか、精神的要素を重視した背景として、物量では他の先進国に勝てないという認識が存在し、反面物質的要素に対する考察を怠ったこと、また緒戦の勢いがついている時はプラスに作用した精神主義が、劣勢においてマイナスに作用したことを指摘した。更に、戦略次元における精神主義は弊害を生む点に言及した。

メガーギー博士は、戦後ドイツの戦争指導に関する議事が焼却されていたため、敗戦責任に関し国防軍の将官等が「歴史は勝者が記述する」とばかりに自決していたヒトラーに罪を着せ、軍はただその命令に従っただけとの神話を広めたが、近年これは批判されている旨言及した。精神的要素に関しては、およそ戦争において信念の果たす役割はあるものの、ヒトラーや将官達はややこれに傾倒し過ぎたきらいがあった点を指摘した上で、当時のドイツ国民はこの戦争を国家、文化の自衛戦争として非常に強く支持していたことを述べた。また、西方作戦とバルバロッサ作戦との差異としては、発達した道路網及びガソリンスタンド等のインフラを有するフランスと、広大で未発達なソ連という作戦地域の特性に起因する影響を指摘した。このほか、ドイツ国防軍が後方地域管理に関して住民の事情を考慮することなく資源を収奪した結果、ソ連をして全人民が戦うほかない状況に追い込み、却って自らの危機を招いたのではないかという点について述べた。

第3セッションの総合討議では、はじめに基調講演者のS・バズイー教授は、2つのセッションにおける議論を振り返って、軍事力が使用される際、政治からの指示が曖昧であり、政治の側における戦争の最終局面に関する構想が非現実的であることが非常に多いこと、将兵の士気や必勝の信念は重要ではあるが、それは軍事理論と整合的なかたちで発揮されなければならないことが過去二千年にわたって繰り返し指摘されてきたと述べた。

次いで議長として石津朋之は、今後日本が紛争の当事国になった場合、想定外の紛争の拡大を防ぐ方策はあるのか、というフロアからの質問を登壇者全員に投げかけた。S・バズイー教授は、紛争に際して人々は常に最悪のケースを考えて行動するものだが、それを上回る悪い状況が生ずることがありうる。このことを認識し、バックアップ・プランを持つておくこと、さらにそうした状況を想定するための訓練が必要で、現代の軍事組織にとっては作戦、部隊編制、教育訓練、装備の面での準備が重要であると指摘した。そしてこれらの点で、歴史から学ぶべきことは多く、それらを一般化された知識として共有すべきであると指摘した。進藤主任研究官は、コンティンジェンシー・プランを考えるための専門部署を作るのも一案であると付け加えた。ミレット教授は、軍事組織において想定外の事態を考えるための、自己批判的な視点を組み込んだ「チームB」を制度化すること、さらに情報を収集し、それを活用して既定のプランに迅速に調整を加えるための仕組みを用意する

ことが重要であると指摘した。花田主任研究官は、紛争をどのように終えるのかを当初から意識しておくこと、齋藤所員は、ガリボリの戦いにおいてハミルトン将軍が軍人の立場から戦争の拡大を止めたことを例に、シビリアン・コントロールのあり方について戦史に学ぶ必要があることをそれぞれ指摘した。

最後に、石津は、戦争の終わり方、撤退のあり方、軍事的成功を政治的勝利に繋げるための定式、軍事の拡大を政治がどのように管理するのかといった諸問題について今後戦史研究センターとして研究していきたい旨述べるとともに、本フォーラムを契機として武力紛争の本質についての理解が深まることを期待するとして議論を締めくくった。